

第3の家族

活動紹介

オンラインの居場所の意義について

1

リアルな居場所や支援では繋がるのが難しい
こども若者の居場所になる

2

成人後の問題の未然予防につながる

活動紹介



奥村春香

26歳。LINE株式会社Product Designerとして入社後、学生から続けていた第3の家族を2023年にNPO法人として設立後独立。Forbes 30 UNDER 30「世界を変える30歳未満」2023受賞。グッドデザインNHA最優秀賞受賞。横浜市男女共同参画貢献表彰など。

第3の家族を始めたきっかけ

家庭環境で悩むことが多く、大学2年生のときに中学2年生の弟が自殺をしました。高校生の頃から複数の支援団体を利用していたものの、このようなことが起きました。私たちのような少年少女は他にもいるのではないかと考え活動を始めました。

「寄り添わない支援」 大人不在で少年少女に生きる希望の火を灯す

家、学校、価値観で悩む小学生～大学生が集まる。24時間誰でも匿名で自分の悩みを投稿できる。最大の特徴は「返信がない」。投稿にはわかる・エールのリアクションをそれぞれ送り合う。投稿内容に応じてAIが自動で、支援やセルフケアに関する情報ページを提示する。同じような境遇の仲間がたくさんいて、みんなで励まし合い、適切な情報を手に入れていく中で「生きる希望」を見つけることができる。ユーザー数は年2万人程度。



楽しいイベントも行う、繋がった後はリアルな居場所に近い

勉強会、お絵描き会、雑談会、などのイベントをリアルやオンラインで行う。

寄り添わない支援として繋がることができたあとは、リアルな寄り添う支援に近い。



夏を乗り越える配信 2025年【gedokun】

**** 第3の家族
278 subscribers



👍 6



Share

Download

Clip



自分で頑張りすぎる子、仮面をかぶるのが上手い子、
大人が嫌いな子、ダウンナーな子、
しんどい私たちが支え合って生きていく場所。



学校では優等生キャラ
gedokunでは等身大の自分でいれた
みんながいたから生きれた



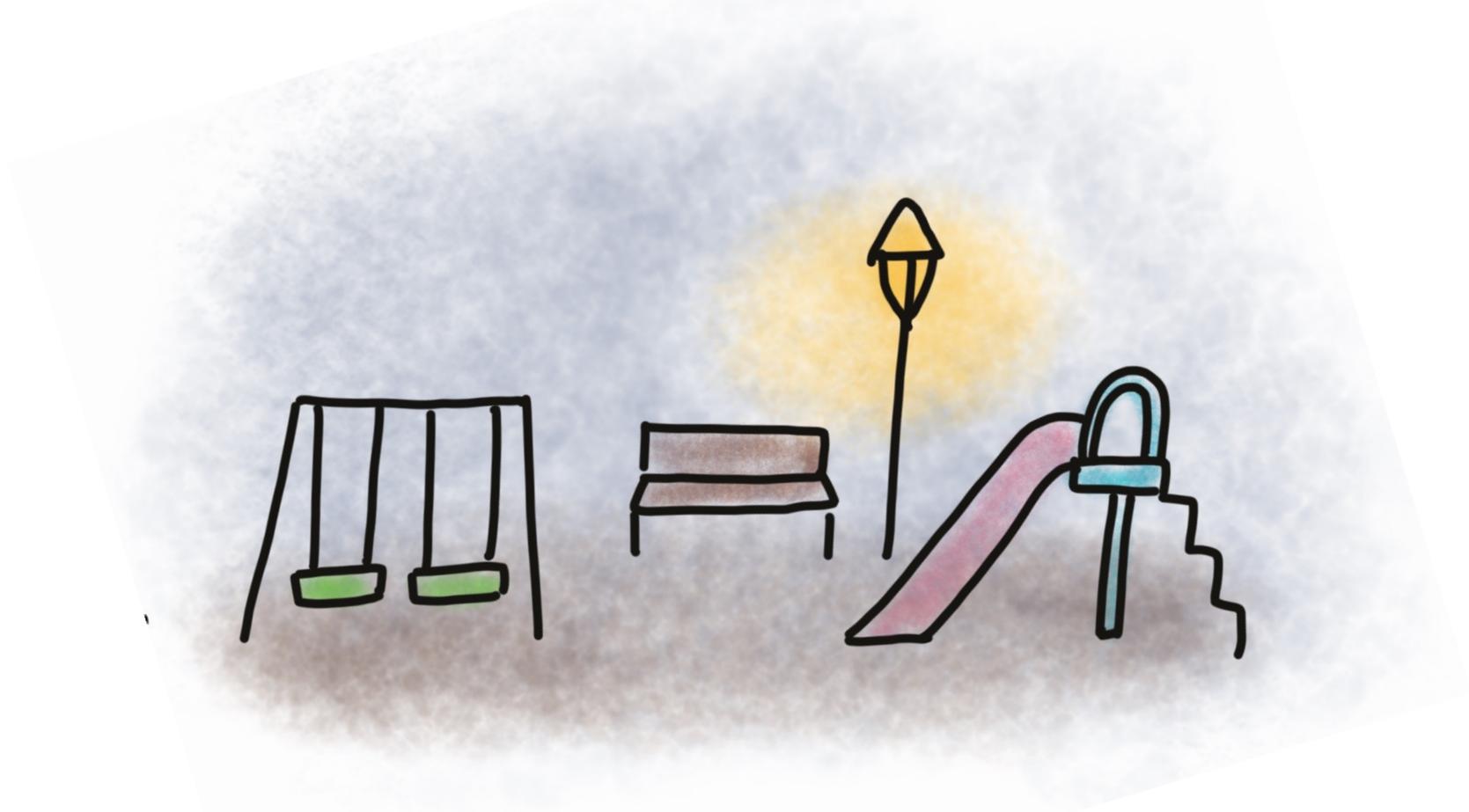
群れるのは嫌い
gedokunは色々な人がいるのが
面白かったし気づきになった
今は自分みたいな人を救いたい



こんな道もあるんだって気づけた
みんなが応援してくれたから親と話せた

広大な「夜の公園」

利用者の対象は明確ではないが、「夜の公園に来る人」は何かしらの居場所を探している人。
何かしらの悩みを持つ少年少女が、励まし合い、遊び、情報交換をする場所。
現実世界と違うのが、全国からたくさんの少年少女が集まり、時間の制約がないこと。



オンラインの居場所の 繋がる層の違い

リアルな居場所や支援では繋がるのが難しいこども若者 支援グレーゾーン・制約が多い・現実が苦手・支援臭を避ける

繋がることの困難度を高める要素は複合的に持つ。

この層は、リアルな居場所や支援にはなかなか繋がらない。または繋がっても離脱しやすい。

虐待ほどではないけど
家がしんどい

いじめほどでないけど
学校がしんどい

漠然と死にたい

支援グレーゾーン

リアルな居場所に来れている層

リアルな居場所に来れていない層

大人なんか信用できない

悪いのは自分だから
自分で頑張る

そんなことをやる
モチベーションがない

支援臭を避ける

塾や部活で忙しい

制約が多い

田舎で何も無い

現実に頼れる人がいない

人混みや対人が苦手

現実が苦手

寄り添うと「うざい」と言われる

寄り添いは重要だが、**寄り添いから取りこぼされているこども若者がいるのではないだろうか。**
最終的には寄り添うためにも、距離感のづくり方が重要。



寄り添ってしまった

そんなこと知ってる

相談できないから
ここ来てるのに

gedokun変わっちゃったね

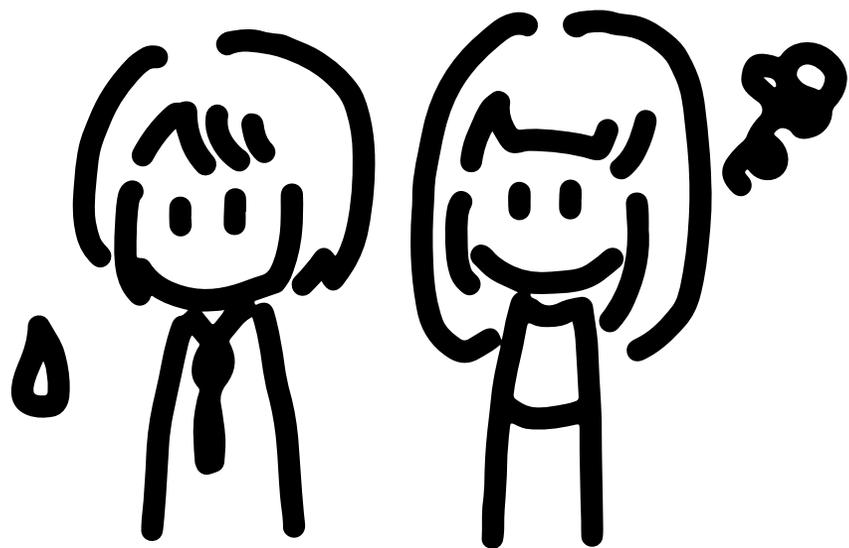
お金儲けでしょ



さりげなく出すのは好感触
児相へ自ら通報月数人

何も無しのままだと、成人後に問題や悩みが現れやすい

リアルな居場所に行かないということは、何かしらのリスク因子を抱え込んでいる。
成人後のメンタルヘルスの悪化、結婚や出産のネガティブイメージなどに繋がりやすい。
「居場所に来ないなら」「緊急性が低いから」と自己責任で終わらせないアプローチが必要。



支援グレーゾーン・支援臭嫌いあるある

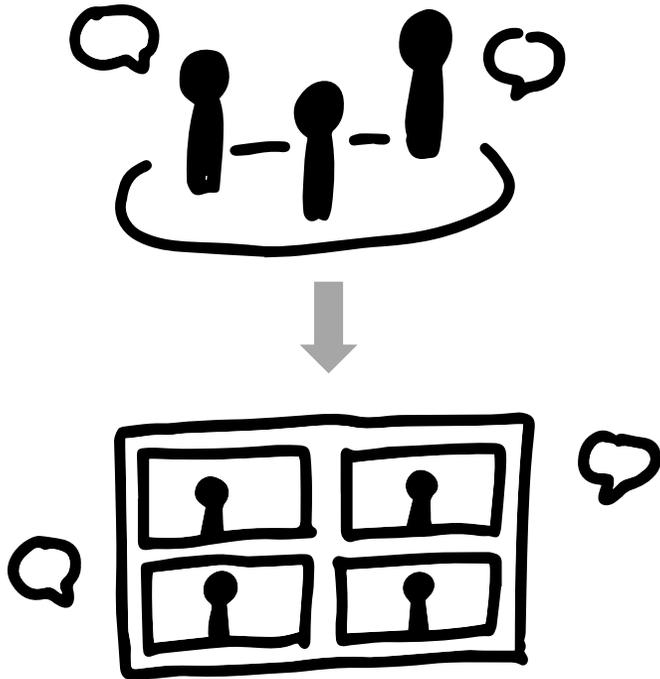
大人になってからメンタルに不調
振り返ってみると、学生時代の影響が..

結婚に良いイメージがない
メンタルも微妙だし自分の生活で手一杯
結婚とか子どもを持つとか自分には縁のない話

オンラインの居場所の 意義

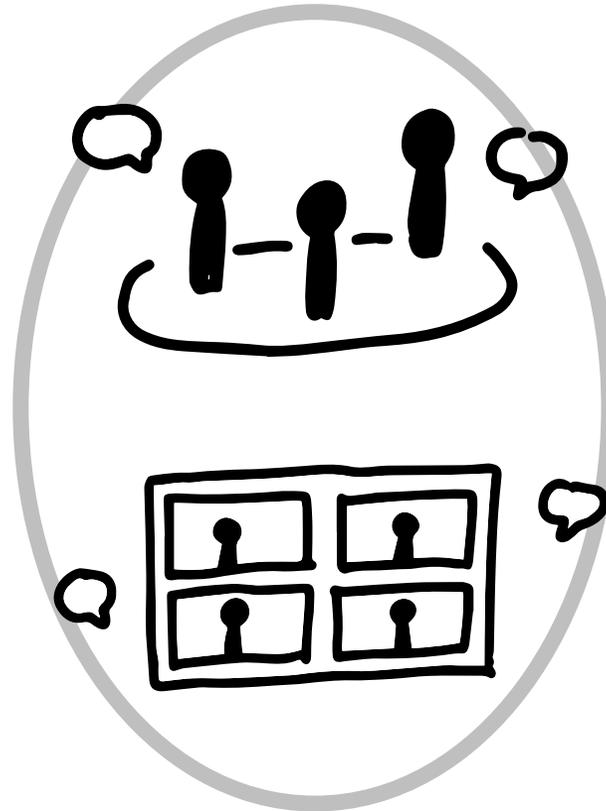
補足的な役割

リアルでも開催可能だが
制約のためにオンラインで開催



拡張的な役割

リアルがありつつ
+ α の体験としてオンラインもある



固有の役割

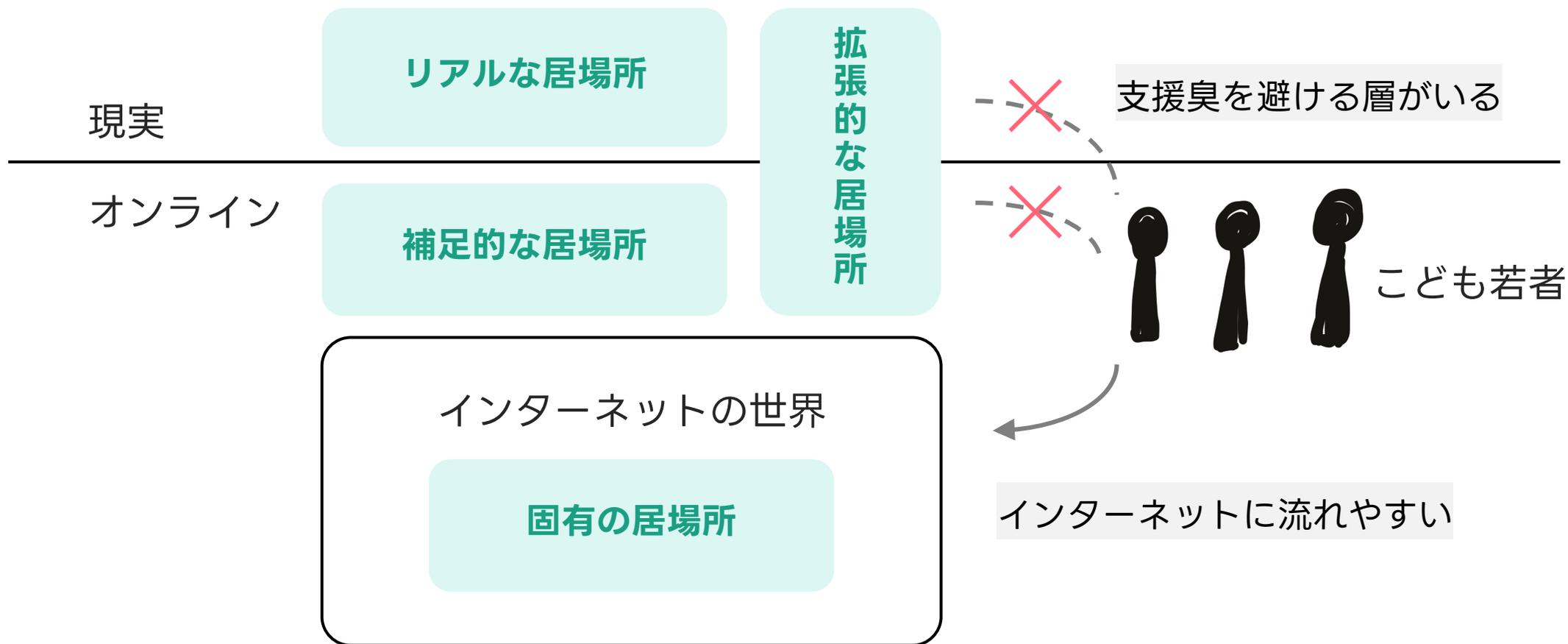
リアルではできない体験
インターネットの特性を活かす
(非現実性)



実践極めて少ない

最もハードルが低く、支援臭を避けることも若者に相性が良い

今ある居場所は「補足」「拡張」が多く「支援臭」を避けることも若者にはインターネットの方が魅力的。インターネットに健全な固有の居場所つくることが必要不可欠となっている。



インターネットの危険な居場所に地域社会が負けている インターネットにも安全な居場所をつくらなければ、穴は空いたまま

デジタルネイティブであり、ネットの利用や影響は避けられない。

一方、インターネットの世界は危険な居場所（闇バイト・自殺）やネガティブな情報（結婚、将来、偏見）が溢れている。刺激的なコンテンツはこども若者を惹きつける。

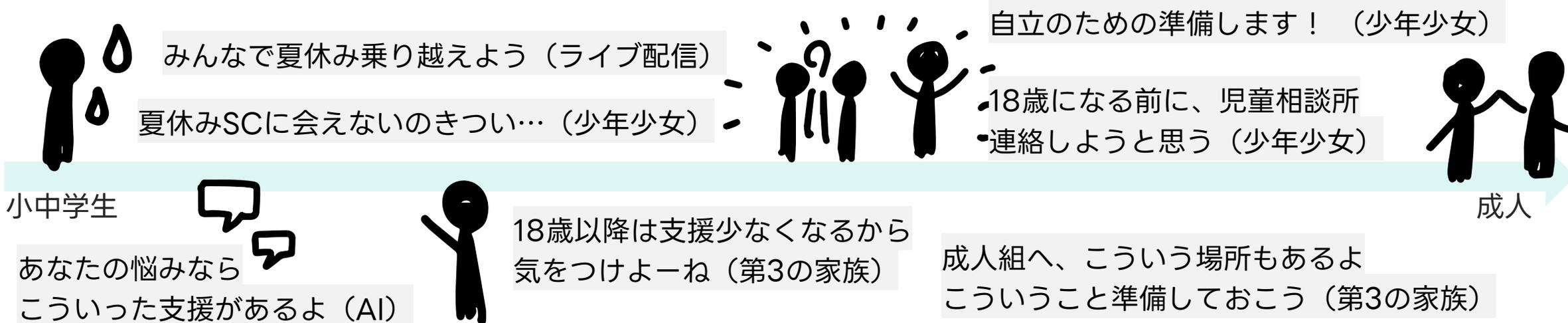
そういった場所に流れつかないように、ネットに安全な居場所を作ることが重要。

「ネットに来る前にリアルの居場所に来てくれれば…」というスタンスでは、前述の取りこぼされるこども若者をずっと取りこぼし続ける。



支援の切れ目に、こども若者が横串を通しやすくする

第3の家族は利用の制約が少ないために、**長年利用**する子も多い（2年～5年以上）。**AIなどを使った推薦システム**や、コミュニティにより「**一人じゃないから頑張れる**」が生まれ、複雑なこども若者の環境を、こども若者がハックしていける可能性がある。もちろん、しんどいこども若者本人が頑張らなければいけない状態は避けたいが、**現実的な手段として**、こども若者が横串を通していく可能性もあるのではないか。



こども若者たちと一緒に姿かたちを 自由に・速いスピードでつくり変えられる

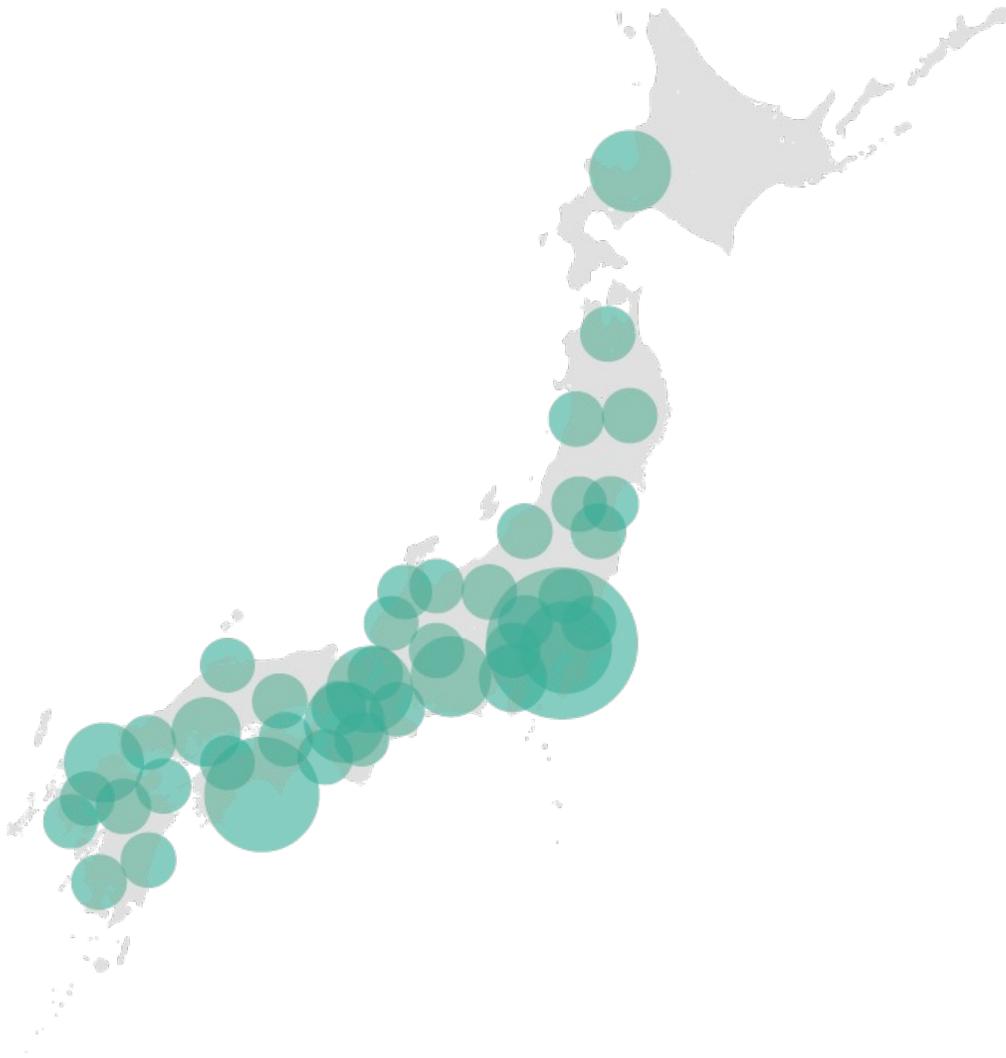
こども若者の声を聞いて、彼ら彼女らのニーズにあったものを一緒に自由に作り変えることができる。リアルな居場所のような建物や物理的な制約を受けない。

変わりゆくこども若者のニーズや価値観についていく点でも、オンラインは相性が良い。



オンラインの居場所の 課題

匿名 × 広域 × 無料 × 非支援臭の取り組みの連携の難しさ



第3の家族の利用者は全国に2万。都市部～郡まで。
おおよその地域はわかるが全員匿名。

一部の自治体が委託をする理由づけが難しく、
非支援臭のため「〇〇県事業」ぽくなると意味がない。
そもそも支援の担当課もない。

第3の家族は寄付などで成り立っているが、
現状成り立っているオンラインの固有の居場所は

「大きい団体でリソースがある」 or

「ボランティアで開発できるメンバーがいる」

でないと継続できず、参入障壁が高い。

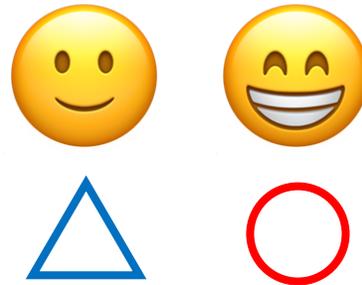
夜の公園だけではなく、いろんな公園ができてほしい。

自治体や支援団体のメニューに「オンライン」が入っていない

以上の通り、オンラインの居場所の意義はあるものの、実施が少ないのが現状。

「オンラインも大事らしい」という他人事ではなく、こども若者に大人が合わせていく必要。
ネットにいる若者と地域が分断されないよう、行政・地域とオンラインの居場所の連携が重要。

オンラインも大事らしい
(自分の地域ではやらない)



オンラインもやろう！
やらなきゃ！

リアルな居場所に来ない層が
取りこぼされ続ける
問題を増幅させる

自団体でつくる or
既存のオンラインの
居場所と連携する

まとめ

オンラインの居場所の意義

リアルの居場所や支援では 繋がるのが難しいこども若者の居場所になる 成人後の問題の未然予防につながる

オンラインとリアルでは「**繋がれる層**」が大きな差になっている。

こどもや地域の制約の影響を受けにくく、幅広いこども若者にリーチができる。

特に、悩みを抱え込みやすい若者と相性が良く、成人後の問題の未然予防に繋がる。

「あったらいいね」で終わらせず、実践していく必要性がある。